

フォーラム ドイツ語圏経済思想史の新たな地平 趣旨

田村信一（北星学園大学）

原田哲史（四日市大学）

1980年代末から、ドイツ語圏経済思想史に関しては、歴史学派とオーストリア学派をめぐる研究が活発になされてきたし、また官房学やロマン主義、さらには社会民主主義や社会的市場経済の思想についても研究が深められつつある。それらの成果に基づいて、我々はドイツ語圏経済思想史の全体像すなわち通史をあらたに眺望すべき時期に来ているといえよう。しかしながら、逆に、通史の眺望を試みようとするならば、これまでまだ深められていない論点が、あるいは獲得された認識であってもまだ十分に知らしめられていない事柄が多々あることに気付かされる。本フォーラムでは、そうした諸論点をピックアップして報告し、討論する。取り上げられるのは、官房学（川又祐）、ドイツ古典派（原田哲史）、オーストリア学派（八木紀一郎）、オールド自由主義（雨宮昭彦）である。

ドイツ語圏経済思想の通史として現在わが国で流布しているものとしてはT.リハ（原田・田村・内田訳）『ドイツ政治経済学』（ミネルヴァ書房、1992年、原著1985年）があり、また通史に近いものとしてK.トライブ（小林・手塚・柘田訳）『経済秩序のストラテジー』（ミネルヴァ書房、1998年、原著1995年）がある。しかし、この15年ほど——リハの原著からすれば20余年——のあいだに内外で目覚ましい発展を遂げた諸研究を視野に入れて、今やそれに代わる新たなスタンダードワークとしての通史を描くことが、わが国において望まれている。このフォーラムはそのための一階段としても位置付けられる。